

「誇り高き家系」(1910)

パーシヴァル・フォードは、どうしてこんなところにやって来たんだろう、と後悔していた。ダンスもしないし、軍人が特別好きなわけでもない。ホノルルの海岸にある、だだっ広いラーナイ(「ペランダ」を意味するハワイ語)で、手や腰をくねらせて踊っている連中全員と顔なじみなのだ。のり付けをしてアイロンがけをしたばかりのまっ白な軍服を着た将校たちや、黒と白の服に身をまとった一般市民、そして、肩や腕をあらわにしている女性たちが熱狂している。(二十世紀に入り王朝時代が終わりを告げると共に、白人が先駆者となり観光開発が始まる)アメリカの第二十艦隊が二年間ホノルルに駐留した後、アラスカにある新たな基地に向かおうとしている。ハワイ諸島(一八九八年にはアメリカ領になっていた)の要人の一人であるパーシヴァル・フォードは、これらの軍人とその女と否が応でも、知り合いにならざるをえないのだ。

それにしても、「知っている」ということと「好きである」ことのあいだには、深い越えられない溝があるものだ。軍隊の女に接し、パーシヴァル・フォードはたいそう驚いた。好みの女性像とは多くの点でまるつきり異なっているからだ。年配の女たちや、良家の未婚の女、眼鏡をかけた少女、そして教会や図書館、幼稚園の委員会で出会うあらゆる年齢層のたいへん真面目な女たちとは、雲泥の差がある。これらの女たちは、寄付や助言を求めてへいへいとしながらすり寄ってきたのである。彼はハワイの財界で最高の地位にあり、莫大な資産と優越感をもって、普段接しているこのような女性たちを思いのままに操っていた。だから、それまで女性を恐れることなど皆無であった。そのような女性との秘めごとは、ベールに包まれていて表面化することなどなかった。でも、軍隊の女の場合、一般の女性とは異なり、独特の上品さ以上のものがあつた。そのようなことに対して、彼はあざけり笑っており、嫌悪感を覚えていた。軍隊の女ときたら、肩や腕をあらわにし、目はきりつと前を向き、バイタリテイにあふれ、女性であることを武器に挑発的な態度をとっており、神経を逆なでするものだった。

軍隊の男どもとも、馬が合わなかった。人生を軽んじて、酒やタバコをやり、肉体の本質的な下品さを主張して、女に劣らず恥さらしであるからだ。考えただけで身の毛がよだつたのだ。相手も同様に毛嫌いをしていた、と思えた。軍隊の連中が、ほくそ笑んでおり、同情したり、嫌々ながら付き合っている、といつも感じていた。彼らが近寄り、フォードの欠点を強調したり、彼がもっていないもの——そのことに感謝しているのではあるが——に注意を向けさせようとしているようにも見えた。まるで軍隊の女どものように嫌な存在なのだ。

実際のところ、パーシヴァル・フォードは女性的な男性でないの言うまでもないことだが、

男の中の男というわけでは決してなかった。そのことは一見ただけで明らかだった。立派な体格をしております病気とは無縁で、体の異常も特に見当たらなかったが、全体的に生気が感じられないのだ。また、人付きあいもよくなかった。長く狭い顔や薄い唇、やせこけた頬、突き出た小さい目に活気が見られなかった。彼のぼさぼさした頭髮は、くすんだ薄茶色で、まっすぐに伸びているが毛は薄く、地味で物惜しみをする性格を物語っていた。このことは、上品ではあるがやせかけているわし鼻も同様のことが言える。血の気が少ないということが、彼の性格を消極的なものにしてはいたが、ただ一点だけ極端な面があった。それは、正義感が強かったことだ。何が正しい行ないなのかについて思い悩んでいた。一般の人たちにとって、愛し愛されることが大切なことであるのと同様に、正しいことをすることが性格上、譲れない一線であったのだ。

パーシヴァル・フォードは、余興が行われていたラーナイ（ベランダ）と海岸の間にある稲子豆イナゴマメの木陰に腰を下ろしていた。そこからダンスをしている人々を見渡し、そのあと海辺の方をよく見ると、美しく輝く波が心地よい音をたてており、南十字星が放つ明かりが衰え地平線に薄暗く照りつけていた。そのような状況の中で、女どもがラーナイで肩や腕をあらわにしている姿を見るにつけ、我慢がならなかった。仮に自分に娘がいても、そんな格好は絶対にさせない、と思った。だが、このような考えは実際の娘を念頭にはおいていなかった。机上の空論にすぎなかった。腕や肩をあらわにした自分の娘など、一度も見たことがないのに、そういう思考パターンに陥っていた。彼はどのようなわけか一度も結婚に縁がなく、苦笑していた。三十五歳にもなるのだが、恋愛経験は皆無で、結婚を空想の世界のことというより下品なことと考えていた。誰でも結婚なんてできるんだ。砂糖きび農園（一八三五年に最初の農園ができ、農業が経済の中心になるにつれ、ハワイ諸島の政治や社会の仕組みも変化していった）や米作農園で汗水たらして働く日本人や中国人の日雇い人夫たちでさえ、結婚している。しかも初対面で必ず結婚を決めているのだ。行動範囲が狭く、結婚以外にすることがなかったのかも知れない。同様のことが、軍隊の男どもや女どもにも言えるのである。彼の場合には、もっと高尚なことがいろいろあった。他の連中とはまったく次元が違う人種なのだ。自分の置かれている境遇に満足し、誇りに思っていた。つまりなしい恋愛結婚を奨励するような家柄ではなく、「高尚な義務感」と「大義への忠誠心」を重んじていたのだ。父親のアイザック・フォードは、恋愛結婚ではなかった。恋愛など経験してみる価値がまったくないどころか、狂気のさたである、という考えであったのだ。キリスト教を異教徒に伝道するために召集を受けたときも、結婚したいと思うことは一切なかった。この点で、息子とも似通っていた。が、キリスト教伝道委員会は儉約思考が強く、特にニューイングランド地方ではその傾向が顕著であった。調査の結果、結婚している宣教師（ハワイ王朝時代には、宣教師たちが

高い地位につき、人々の行動や考えを変えていくほど強い影響力を持つようになった)のほうが独身の宣教師よりも、一人当たりで計算すればより費用が少なくすみ効率的である、と判明した。そこで委員会は、彼に結婚するように命令を下した。さらに、配偶者も世話してくれた。その女性も熱心な宣教師であったが、結婚のことはいっさい眼中になく、ただ異教徒への伝道活動に興味があるだけであった。二人はボストンで初めて顔を合わせた。キリスト教伝道委員会が見合い場所をはじめ、何から何まで準備してくれ、週末には結婚をして、ホーン岬(南米大陸の最先端の岬)経由の長い航海の旅に夫婦そろって出発した。

パーシヴァル・フォードはそのような家柄の出身であることを誇りにしていた。生まれつき身分が高く、崇高な特権階級を自認していたのだ。父親にたいする誇りも相当なものであった。厳格で意気揚々としている父親のアイザック・フォードの姿が息子の脳裏に焼きついている。机の上にはキリスト教の戦士の人形が、そして寝室には父親の肖像画が飾られていた。その肖像画は、国王の下で総理大臣を務めたときに描かれたものであった。彼はこのような高い地位を要求してこの世の富を独り占めにしたのではなく、総理大臣として、また後年は銀行家としてキリスト教の活動に多大な貢献をした。ドイツ人やイギリス人などの貿易上の仲間たちは、父親のアイザック・フォードが金儲け主義であると冷笑していたが、息子はまったく見当違いであると主張していた。ハワイの先住民たちは、封建時代の束縛から急に自由な身になり、不動産の性質や重要性について何の知識もなかった。そこで先住民たちの広大な土地が剥奪はくたつされるという危険が迫ってくると、彼は不動産業者と先住民の仲介をして莫大な利益を得た。不動産業者たちがアイザック・フォードのことを思い出したがらないのは、無理からぬことであった。が、彼は自分の莫大な資産を自分だけのものとは考えていなかった。自分のことを神の財産管理人であるという思いで、得た財源を使って学校や病院、教会を建設した。不況の後、砂糖が四割も利益をだしたり、設立した銀行の経営がうまくいき鉄道株を所有するまでになったのは偶然のことであった。とりわけ、一エーカー(約四キロ平方メートル)当たり一ドルで購入したオアフ島にある五万エーカー(約二十万平方キロメートル)の農園が、十八ヶ月ごとに一エーカー当たり八トンもの砂糖を生産するようになったことも、同様であった。実際のところ、アイザック・フォードは英雄であったのだ。裁判所の前にあるカメカメハ一世(ハワイ諸島を統一して、一八一〇年にハワイ王国を建設、初代国王となった人物)の像の隣に父親の像が並んでいてもいいぐらいだ、と息子はひそかに思ったりしていた。父親はこの世から姿を消してしまっただが、息子は父親のような風格はないにしても、少なくとも頑固にすばらしい仕事を続けていた。

パーシヴァル・フォードはベランダに視線をもどした。そして、「短い腰巻きをはいて踊るフラ

ダンスと、肩が出るほど首のラインが低い服を着て踊る自民族のデコルテダンスの違いは何なのか？ 程度の問題なのか？」と自問した。

そんなことをあれこれ考えていると、肩に手が触れるのを感じた。「こんにちは、フォードさん、こんなところで、何をなさっていらっしゃるのですか？ 祭り気分です、ぱつとやりましようよ」

「こういうものを見ている、寛大であろうとしているんですよ、ケネディ博士」と、パーシヴアル・フォードは真面目に返事をした。「お座りになりませんか？」

ケネディ博士は腰を下ろし、強く手を叩いた。そうすると、白い服を着た日本人のボーイがすばやく注文を聞きにやって来た。「スコッチウイスキーのソーダ割り」と答え、フォードの方を向いて、「もちろん、注文されることを要求しているわけではありませんよ」

「でも、私も何かいただきますよ」と、フォードはきつぱりと言った。博士は目に驚きの表情を浮かべており、ボーイは返事を待っていると、「レモネードをお願いします」とフォードが注文をした。

博士はおどけて腹から大声で笑い、ハウ・ツリー（熱帯地方の海岸の砂地に生える常緑高木）の木陰にいるミュージシャンをちらつと見た。「あれはアロハ・オーケストラですね」と、博士は話しかけた。「毎週火曜日の夜に、ハワイアン・ホテルでショーをしているんですよ。たいへんな賑わいですね」

全ての楽器を従えて、ギターを奏で^{かな}ハワイの曲を歌っている男に、博士は目を奪われくぎ付けになった。その歌い手をじつと見ていると、深刻な顔つきになり、フォードに話しかけているときも表情に変化はなかった。

「ねえ、フォードさん。ジョー君にもう少し寛容になってもよいのではないのでしょうか。サーフボード推進委員会がジョー君を商談のためにアメリカ本土に派遣する計画に反対しているそうですね。そのことについてずっとお話ししようと思っていたんですよ。計画に賛成されて、ジョー君を国外に追い出すほうが、あなたにとって喜ばしいことにちがいないと思っていたんですよ。そのようにして迫害を終わらせるほうがよいのではないのでしょうか」

「迫害ですって？」と、パーシヴアル・フォードは不審がって、まゆをつり上げた。

「あなたの行為をどのように表現しても、勝手ですがね」と、ケネディ博士は話を続けた。あなたはジョー君を何年も迫害しているでしょう、かわいそうに。彼があなたから迫害を受けるのは、筋違いですよ。それどころか、あなたのほうが間違っていることを認めざるをえなくなりま

すよ」

「筋違いですって？」と、フォードは薄い唇をぐつと噛みしめて抗議した。「ジョー・ガラン

ドは、ずぼらで怠惰なやつですよ。以前からずっと、浮浪者で道楽者でもあります」

「だからと言って、そんな風にしつこく追い回さなくてもいいでしょう。あなたが大学を卒業して故郷にもどり、非組合員の現場監督として大農園で働いているジョー君にした最初のことは、首にしたことですよ。あなたは百万長者、相手は月に六十ドルの労働者でした」

「それは最初にしたことではありませんよ」と、パーシヴァル・フォードは委員会活動で話すような調子で、まるで裁判官のように反論した。「最初に警告をしたんですよ。砂糖きび農園の親方は、ジョーが有能な現場監督であると言っている。私もそのことに関しては何も異論はないんです。不満なことは、勤務外にすることにあるんですよ。ジョーは私を付けるようなことをすることが気に食わないんです。私が設立した教会の日曜学校や夜間学校、裁縫教室が行われている夕方、彼はギターとウクレレを長時間弾きながら、強い酒を飲みフラダンスを踊っている。それは妨害行為以外の何ものでもないこととは思いませんか？ 最初の警告の後、ジョーに偶然出くわしたんです。それは決して忘れられないことです。向こうにある小屋のあたりで夕方出会ったんです。最初にフラダンスの歌に気づいたんですけど、すぐにその光景も目にするようになりました。そこには月の光のもと、みだらな格好をして踊り狂っている少女たちがいたんです。その少女たちに私は、清い生活と正しい行いについて一生懸命に教えたんですよ。よく覚えていますが、そこにはミッシヨンスクール（キリスト教団体が異教徒の多い国に布教の目的で設立した学校）を卒業したばかりの女の子たちが三人もいたんですよ。もちろん、彼を解雇しました。そのことは、ヒロ（ハワイ島東部の市）でも同様でした。世間の人たちは、私が故意にメイスン牧師とフィッチ牧師を説得してジョー・ガーランドを解雇させたと思っただけです。それはちがいます。牧師たちが私にそうするように要求してきたのが真相なんです。ジョーは非難されるべき行為により、牧師たちの仕事の邪魔をしたんです」

「その後、ジョー君が汽車に乗っていると——あなたが経営している鉄道ですよ——、わけもなく降ろされてしまった、と聞いています」と、ケネディ博士はパーシヴァル・フォードを非難した。

「そんなことはありませんよ」と、フォードはすばやく返答した。「私の事務所においていただいた、半時間ほど話をしたんです」

「非効率という理由だけで、首にしたんでしょう？」

「とんでもない、不道德な行為をしたので、首にしたんですよ」

博士は、悔しさのあまり歯ぎしりをして、その言葉をあげけり笑った。「君に何の権利があった、裁判官と陪審員の役を果たすんだい？ 地主制度を理由に、骨身を削って働く部下の不滅の

精神をコントロールできるとでも思っているのかい？ 私は君のかかりつけ医を長年やっているよ。私がスコッチウイスキーのソーダ割りをやめなければ、君は二度とお世話にならないと言いだすのを、私が喜ぶと思っているのかい？ そんなことは、ばかばかしいことだよ！ 人生を生まじめに考えすぎなんだよ。また、ジョー君が口論を外外部にもらして——君には雇われていなかったが——、自主的にそのことを申し出て罰金を支払うと言っているのに、砂洲での六ヶ月にもおよぶ強制労働を命じたよ。それは彼を見殺しにしたようなものだった、ということが分からないのかい？ ジョー君に、とつてもつらくあたたんだよ。君が大学に入学した初日のことを思い出したよ。——私は寄宿生だったんだが、君はただの通学生だったよ。—— そのとき、水泳の手ほどきを受けることになっていて、プールに三回だけ潜らなければならなかった。——覚えてるかい、それは新入生の誰もがしなくてはならなかった、ごく普通の訓練だったんだ。でも、君は尻込みをして、どうしても泳ごうとはしなかったよ。そのとき、異常なほど興奮して、恐怖におののいていたのをはつきりと思い出すよ。——」

「その日のことは、よく覚えているさ」と、パーシヴァル・フォードは、ゆっくりと切り出した。「手足がガタガタしていたのは本当さ。でも、泳げないと嘘をついていただけなんだ。寒さで震えていただけのことなんだ」

「君のために奮闘をしたのは、いったい誰だと思っているんだい？ しかも、君が泳げないのを知っていると断言し、君以上の嘘までついているんだよ！ ジョー君は、プールに飛び込んで、いち早く君を水中から引き上げたんだ。他の学生たちが後から飛び込んで来たものだから、もう少しのところまで溺れてしまうところだったんだよ！ その学生たちは、そのときになってやっと、君が実は泳げるという事実気がついたんだ」

「もちろん、そんなことは知っているさ」と、フォードは、冷淡に言い返した。「でも、若いときの寛大な行いが、生涯の悪行を帳消しにするわけではないんだよ」

「ジョー君は、君に悪いことは一度もしていないんじゃないかい？ 個人的なことを、あらかさまにはしていないという意味だがね」

「していないさ」と、パーシヴァル・フォードは答えた。「まったく非難の余地がないさ。ジョー君に対してこれっぽっちも個人的な恨みはもっていないんだ。彼を取り巻く環境が悪いんだ。それだけさ。生き方自体が気に食わないんだよ——」

「逆説的に考えると、ジョー君が君の生き方が気に入らないと主張してもいいことになるね」と、博士は口をはさんだ。

「そのように考えてもらっても結構だよ。でも、そんなことは取るに足りないことだ。あいつが

馬鹿なだけだ——」

「それには異議があるね」と、博士はさらに口をはさんだ。「君がジョー君に意地悪をして、仕事を次から次へと奪っていったことを考えてみてよ」

「ジョーは、ふしだらで不道徳なところが問題なんだ」

「ちよつと待つてよ、フォードさん。くどくどと繰り返し言わなくていいよ。君はニューヨークランド（米国北東部の六州）直系の家柄の出であるのにたいして、ジョー君は半分カナカ人（ハワイの先住民）の血が混じっているよね。君の血は冷たいが、彼には暖かい感じの血が流れているんだ。人生は、人によっていろいろあっていいんだよ。ジョー君は一生、笑ったり歌ったり踊ったりして暮らす主義で、人に対して愛想がよく寛大かつ率直であるので、人が自然に集まってくるんだ。

それに対して、君は歩いて巡回するラマ教の地藏車（経文の記された回転式の礼拝器）のように、道徳的に正しいとされていることを着実に実行する主義であるが、道徳的に正しいとされている人たち以外には友人は誰一人としていないよね。道徳的に正しいとされている人たちは、何が正しいかという価値観でつながっているだけなんじゃないかな。その結果、世間の人たちの評価として、君は世捨て人、ジョー君は愛想のよい人ということになるんだ。どちらが人生の勝利者だと思う？ 人間というものは、仕事があり賃金が十分に得られてはじめて生きられるんだよ。その賃金が不十分なものであれば、その仕事をやめざるをえなくなり、自殺に追い込まれることは自明の理であるんじゃないかな。ジョー君が現在、君からもらっている賃金はあまりにも低すぎて、このままでは飢え死にすることは明らかだよ。彼と君とは別個の人間なんだ。ジョー君からの人生の分け前である歌や愛のために、君は飢え死にするかい？」

「バカバカしいことだ。そんなことは御免こうむるよ」と、パーシヴァル・フォードは反論した。

それに対して、ケネディ博士は、笑みを浮かべて次のように言った。

「君にとって、愛とは単なる言葉で、その意味は辞書から得られるものにすぎないよね。現実の愛は、純情で、胸がときめき、壊れやすいもので、そういうことを君は分からないんじゃないかい。神が君や私やその他の人間を創りだし、愛も創り出したんだ。話は元にもどるが、もうそろそろジョー君をいじめるのをやめてもいいんじゃないかい。そうしないと、君の価値が下がるよ。君がやっていることは、とても卑劣なことなんだ。今すべきことは、ジョー君に援助の手を差し伸べることではないのかい」

「どうして、私がそんなことをしなくてはいけないんだい？」とフォードは要求した。「あなたがすればいいじゃないか？」

「もうずつとしているよ。今も援助の手を差し伸べているところだよ。ジョー君をハワイから追

い出すという決定を、キリスト教布教委員会がしないよう君に尽力してもらいたいと思っ
てるんだ。その他、私は彼のためにメイソン君とフィッチ君も一緒にヒロで働けるようにしてあげ
たんだよ。今までにジョー君に六つの仕事を紹介してあげたんだが、ことごとく君はジョー君を
首にしたんだ。そのことを差し置いても、このことだけは忘れてほしくないんだ。もう少し正直
に話してほしい。他人の失敗を、ジョー君のせいにするのはよしな。君はそんなことは絶対にし
ていないと言いつ張るだろうが、それはいい趣味とは言えないよ。大変理不尽なことなんだ」

「何のことか見当がつかないね」と、パーシヴァル・フォードは返事をした。「あなたはひどく興
奮して、遺伝に関する不確かな科学理論を振りかざし、ジョーには責任がないと主張しているに
すぎないよ。ジョーの不道德には責任がなくて、私の責任が誰よりも重いというのがどうしても
合点がいかない」

「それは繊細さの問題、あるいは好みの問題だね。だから、私の言っていることが、理解不能な
んだよ」と、ケネディ博士は平静さを取りもどした。「暗にそっとしておくというのは、社会のた
めにとても良いこともあるが、君は暗に無視すること以上のことをしてしまっているんだよ」

「暗に無視するとは、いったいどういうことなんですか!」

その言葉に博士は激怒した。スコッチウイスキーのソーダ割りを一杯ひっかけた以上に顔はま
っ赤になり、次のように答えた。

「君のお父さんの息子のことだ」

「何を言っているのか、まったく分からないよ」

「これ以上簡潔に説明することなんかできっこないよ。お望みなら、もっとはっきりと言うよ。

アイザック・フォード氏の息子の一人であるジョー・ガーランド君のことだよ。君の弟になるね」
パーシヴァル・フォードは、困ったような様子でじつと座り込み、顔はびくくりした表情であ
った。ケネディ博士は丹念にその顔色を観察していると、その表情はぎよつとしたようになり、
きまり悪そうなものになっていった。

「まさか、知らなかったとは言わないだろうな!」と、博士はついに大声を出した。

フォードの顔色は徐々に灰色に変わり、次のように答えた。「とてもたちの悪い冗談だ。とって
も不快だ!」

博士は自分を落ち着かせようとして、次のように説明を加えた。「このことは世間のみんなが知
っていることですよ。当然、君はその事実を知っていると思っていました。でも、知らないのな
ら、もうそろそろ知っておくべきだと考えたんだよ。その事実を頭にたたきこんでもらえて、う
れしいよ。君とジョー・ガーランド君は兄弟なんだ。腹違いの兄弟なんだよ」

「うそだ！」と、フォードは大声を出した。「冗談でしょう。ジョーの母親はエリザ・クニリオだよ」(ケネディ博士は、うなずいた)「ジョーの母親のことはよく覚えてるよ。池でアヒルを飼っている、タロイモを畑で育てていたんだ。父親は、波止場でごろごろしていたルンペンのジョゼフ・ガーランドさ」(それに対して、ケネディ博士は首を横に振って否定した)「父親は二三年前に亡くなったよ。アル中だったんだ。息子のジョーも自堕落な生活を送るようになったんだ。血は争えないね」

「本当のことを誰一人として君に言わなかったんだね」と、ケネディ博士は間まをおいて不思議そうに言った。

「博士、あなたはとてもひどいことを私におっしゃいましたね。とうてい我慢できません。それが正しいということを、証明してください」

「自分自身で証明したらどうでしょうか。向こうにいるジョー君をよく見てごらん下さい。横顔がよく似ているでしょう。ジョー君の鼻など、君の父親のアイザック・フォード氏の鼻とそっくりだ。君の鼻はほっそりしているね。でも、よく見てよ。ジョー君の鼻は多少ふっくらしているが、鼻の輪郭は瓜二つだ」

パーシヴァル・フォードは、ハウ・ツリー(ハワイの数百年という伝説の木)の木陰で演奏している白人とカナカ人(ハワイの先住民)の混血児を凝視した。そうすると照明による効果のせいか、まるで亡霊でも見ているかのように思われた。照らされている顔のつくりの一つ一つが、確かによく似ていた。いやむしろ自分のほうが、あの筋肉隆々で豊かな体型の持ち主の亡霊であるかのような錯覚におちいった。さらに言えば、二人の容貌がアイザック・フォードと瓜二つであったのだ。ところが、今まで誰からもそのことを知らされていなかった。パーシヴァル・フォードは父親であるアイザック・フォードの顔の隅々まで熟知していた。頭の中には、父親の縮小模型や肖像画、写真が次から次と走馬灯のように現われた。が、腹違いの弟のジョーの顔をいろいろな角度から何度も観察すると、二人がなんとなく似ているにすぎないとも思えてきた。厳格な父親の容貌が不明瞭で審美的に再現されるのは、まさに悪魔の仕業しわざであった。一方、ジョーが振り向くと、ほんの一瞬であるが、フォードは、亡くなった自分の父親がジョー・ガーランドの仮面をかぶってじっと見つめているとも思った。

「それは当然なことですよ」と、ケネディ博士が言っているのを、フォードはぼんやり聞いていた。「長い歴史の中で、いろいろな血が入り混じっているんですよ。世間のことを考えてみれば、当たり前でしょう。船員だって女王と結婚し、王女を出産することもあり、そういうことが繰り返されるのです。特に、ハワイ諸島ではごく一般的なことです」

「でも私の父親に限って、そんなことはありません」と、フォードは博士の話を腰を折った。「またそれを言う」と、博士は肩をすくめた。あんたの言っていることは、地球以外の宇宙に生命が存在するということと同様に、ほとんど実体のないものだ。アイザック・フォードおじさんが生涯にわたって厳格な生活を送ったかということ、誰にも分からないことであって、ましてやおじさん自身には判断がつかないと思うよ。あんた以上に、理解しにくいことなんだ。得体の知れないもの、というしかありませんね。だけどフォードさん、分かっただけでほしいのは、お父さんにも多少の荒々しい血が流れていたということ。それをジョー君が受け継いだんだよ。宇宙の得体の知れない生命をすべてね。君はお父さんの禁欲的などころをすべて受け継いだということになる。あんなの血が冷たく、秩序立っており、統制のとれたものであるからといって、ジョー君にいやな顔をしちやいけないよ。彼があんたのしていることを台無しにするといつても、そのことの半分は両方の父親のアイザック・フォードさんの仕事なんだからね。でも、お父さんの血はあんたにより影響を及ぼしていることもあるだろう。君がお父さんの右腕だとすれば、ジョー君はお父さんの左腕と言えるね」

パーシヴァル・フォードは沈黙をしていた。ケネディ博士は、黙って忘れかけていたスコッチウイスキーのソーダ割りを飲み干した。向こうの方から、ひっきりなしに自動車のブザーというクラクションの警笛が聞こえてきた。

「ああ、迎えの車だ」と、博士は立ち上がり、次のように話を続けた。「もう行かなくなつては。君を不愉快にさせてしまったことは申し訳ないと思っっているが、同時に満足もしている。あのね、お父さんの荒々しい血はきわめて少量であったので、ジョー君がすべて受け継いでしまったよ。最後にもう一つ言いたいんだが、お父さんの左手(ジョー・ガランドのこと)があんたを不愉快にさせても、ジョー君を殴り飛ばさないでほしいんだ。その他のことでは、ジョー君は大丈夫だ。はつきり言って、孤島であんたかジョー君のどちらと一緒に暮らしたいか、と問われれば、間違いないくジョー君と答えるよ」

幼い子供たちが芝生の上を裸足で走りまわって遊んでいたが、パーシヴァル・フォードは見向きもしなかった。ハウ・ツリーの木陰で歌っている男をじっと見ていたのだった。その顔をもつとよく見るために、一度近づいたりもした。そのとき、シーサイド・ホテルのボーイが、老齢のために足が弱って、よたよたと歩いてそばを通り過ぎて行った。そのボーイはもう四十年もハワイ諸島で暮らしていた。フォードは合図すると、ボーイはうやうやしくかしくまわってやって来た。「ジョン、ちょっと聞きたいことがあるんだ。ここに座ってくれないかい」と、フォードは言った。

ボーイは予期せぬ丁寧さにどきもを抜かれて、目をぱちくりさせながら、「はい、ありがとうございます」「さいます」と言っ、恐るおそる腰を下ろした。

「ジョー・ガーランドとは、いったいどういう人物なのかね？」

ボーイは目をぱちくりさせながらフォードを見つめ、咳ばらいをして沈黙した。

「さあ、いったい何者なのか言ってくれ」と、フォードは強く要求した。

「冗談でしょう」と、ボーイはやっとのことで声を出すことができた。

「冗談ではない。真剣に聞いているんだ」

その言葉を聞いて、ボーイは後ずさりをしながら、次のように念のために確認をした。「まさか、見当がまったくついていないとでも、おっしゃるのではないでしょうね」

「だから、真実を知りたいんだよ」

「ガーランドさんは…」と、ボーイは切り出したが、急に話をやめて、お手上げ状態という様子で目をきよるきよるさせた。「このことは誰にも聞かないほうがよろしいんじゃないでしょうか。あなた様はそのことをご存知だと皆んな思っています。だから…」

「だから、なんだと言うんだい」

「だから、ガーランドさんを目のかたきにしておられると、以前から我々はそう思っていたのです」

アイザック・フォードの写真や小画像が、息子の頭の中でぐるぐると回っていた。父親の亡霊に取り付かれているようであった。「おやすみなさいませ」と、ボーイが足を引きずって立ち去るのに、やっとのことで気がついた。

「ジョン」と、パーシヴァル・フォードはボーイを呼び止めた。

ジョンはまたもどつて来て、フォードの前に立った。目をぱちくりさせており、神経質そうに唇を舌でペロペロしていた。

「まだ、肝心なことを話してないだろう」

「ガーランドさんについてですか？」

「そうだ。いったい何者なんだ」

「どうしても、とおっしゃるなら言いますがね。あなた様の弟さんですよ」

「ジョン、ありがとう。おやすみ」

「そのことを本当にご存知なかったのですか？」と、年配のボーイは質問をし、すべてのことを話してしまった安心感から長居を決めこんでいた。

が、「ジョン、ありがとう。おやすみ」と、先ほどと同様の答えが返ってくるだけであった。

「はい、ありがとうございます。雨が降りそうですね。おやすみなさいませ」

雲一つなく晴れわたった空には、星や月が輝いているだけであった。雨が降りだしてきたが霧雨で弱々しいものであり、それはまるで蒸気の水しぶきのようなようであった。誰一人として雨を気にする者はなく、子供たちは裸足で芝生を走り回ったり、砂場に飛び込んだりして遊び続けた。まもなく雨もやんだ。南東の方向には、ダイヤモンドヘッド（ハワイ州オアフ島にある死火山）が一つのシミのように見え、その輪郭はくっきりとしており、星を背景に噴火口の形だけが、目に止まった。ゆつくりとした間隔で、浜辺の波が泡を砂浜から芝生へと運び、はるか彼方には月の光を浴びて泳いでいる人たちの姿が、黒い小さな粒のように見える。ワルツを歌っている人たちの声はいつの間にか聞こえなくなった。辺りが静まりかえっているなか、木陰のどこからか、突然女性の笑い声が聞こえた。それは男女が愛しあっている声であった。パーシヴァル・フォードはびつくり仰天し、ケネディ博士の言葉を思い出した。砂浜まで引きずっていった舷外浮材（外に張り出して取りつけられた安定用の浮材）の付いたカナーの下で、カナカ人の男女がけだるそうにもたれあっている。その様子はまるで、ロトスを食べている人たち（ギリシャ神話：ハスの実を食べて一切を忘れ、至福の境地に暮らしている人たち）のようであった。女性たちは白いハロク（ハワイのシルクのドレス）に身をまとっており、舵取りの男たちの黒い頭が女性たちの肩にもたれかかっていた。はるか彼方には、低い砂洲によって海から隔てられた潟湖（せきこ）があり、その入り口あたりに広まっている砂浜では、男女が手をつないで歩いていた。二人は白みがかったラーナイ（ベランダ）に近づくと、女性は腰にまいてあるベルトに手をやり、はずそうとしている。パーシヴァル・フォードの前を通り過ぎるそれらの男女のなかに、知り合いの船長や少佐の娘を見つけたので会釈をした。こんなことは幻影としか思えない。今度は暗い稲子豆の木陰で、男女の愛し合っている笑い声がまた聞こえてきた。自分が座っていた椅子を通り過ぎて寝室に戻ろうとすると、裸足の子供が日本人の子守女にたしなめられているのを目にした。そして、歌っている者の声が優しい甘く優しいものに変わり、ハワイのラブソングが演奏された。高級船員や女性たちは抱きあいながらラーナイでダンスに興じていた。するとまた、稲子豆の木陰から女性の笑い声が聞こえてきた。

パーシヴァル・フォードは、そのようなことすべてが気に入らなかつた。女性の愛のささやき声、舵取りの頭がハロクの上に載せられていること、男女が海岸を散策すること、高級船員と女性たちがダンスをすること、ラブソングを歌っている者の声、そして、弟がハウ・ツリーの木陰で一緒に歌っていること、すべてにイライラしていたのだった。特に、女性の笑い声には我慢がならなかつた。そして、奇妙な考えがどんどん頭に浮かんできた。自分はアイザック・フ

オードの息子であるので、父親に起こったことが自分にも起こるかも知れない。そのように考えるだけで、顔が熱くなり赤らむのを感じ、言葉では表わせないほど恥ずかしいと思った。自分の家系に対して、ぞつとする気持ちになったのだ。それはあたかも、父親がハンセン病患者で、自分の血液にもその恐ろしい病原菌が入り込んでいるかもしれないと、ある日突然に知らされたのと同様の気持ちであった。父親は、ハワイ国王を守る厳格な軍人であったと聞かされていたが、猫をかぶっていたんだ！ 父親とルンペンと、いったいどんな違いがあるというのか？ パーシヴァル・フォードが長年にわたって築きあげてきた「誇り高き家系」というものが一瞬のうちに崩れ去っていた。

数時間が経過しても、軍関係者は笑ったりダンスをしており、現地のオーケストラは演奏を続けていた。フォードは、青天の霹靂（きれき）のごとく降りかかってきた難問に苦悩していた。肘をテーブルの上に置き、頭は手で支えながら、静かに祈っていた。その姿はまるで、うんざりした見物人のようであった。ダンスの合間をぬって、軍関係者や一般市民たちは、急いでやって来ては月並みな話をした。が、その者たちがラーナイ（ペランダ）のところにもどつてしまうと、心を悩ましている問題に再度取り組むことになった。

フォードは父親が理想郷まで至らなかったことについて論理的な答えを見つけようとし、その根拠として、ずる賢い巧妙な論理を用いた。それは自己中心主義という考えを基にして、勝手に頭の中だけで創りあげたようなものであったが、精神を落ち着けるといふ点ではうまく機能した。父親はまわりの誰よりも立派な肉体を持っていたが、精神的にはまだまだ成長の途中にいたにすぎない、ということとは否定できない事実である。それに対して、自分は肉体・精神ともに完成した存在なのだ、と考えることにした。その結果、自分は父親の名誉も回復すると同時に、自身の身分を高めることにも成功したのだ。パーシヴァル・フォードのもともと少ない自己中心主義の割合が、飛躍的に大きなものになっていた。父親は、許しを受けるべき偉大な人物なんだ。そう考えるだけで、心地よい満足感を覚えた。父親は偉大な人物であったが、自分はさらにその上をいつているんだ。自分は父親を許すことができるし、さらに、父親の思い出を汚れた場所から神聖な場所に回復することもできる。また、パーシヴァル・フォードは、父親が人生のある時期に横道にそれた結果を無視したことを称賛した。だから、自分も人生における汚点を無視してもよいのだ、と考えるようになった。

ダンスは終わりに近づいていた。オーケストラは「アロハ・オエ」（ハワイ王朝最後の女王が一八九八年に作詞したといわれる歌）の演奏を終え、帰る準備をしているところであった。フォードは、手をたたいて日本人のボーイを呼んだ。

「あの男に、会いたいということを伝えてくれ」と、ジョー・ガーランドを指差しながら言った。
「今すぐ来るように言ってくれ」

ジョー・ガーランドは数歩先までやって来て、そこにうやうやしく立ち止まった。手は持っているギターを落ち着かない様子でさわっていた。腰を下ろすようにも言われていなかった。

「あんたは私の弟なんだってね」と、フォードは訊ねた。

「ええ…、みんな知っていることでございます」と、驚いた様子でジョーは答えた。

「うん、そのようだね」と、ぶつきらぼうに言った。「でも、今晚までそのことは知らなかったんだ」

腹違いの弟は、話の続きを落ち着かない様子で黙って待っていた。そうしているうちに、フォードは冷淡な調子で次のようなことを言い出した。

「あんたは私が最初に学校にやって来たとき、学生たちが私の頭を水中に押し込んだのを覚えてるかい？」と尋ねた。私の肩をもったのはなぜなんだ？」

腹違いの弟は、恥ずかしそうに微笑んだ。

「私たちが兄弟であるということを知っていたからかい？」

「ええ、おっしゃるとおりでございます」

「でも、私はそのことは知らなかったんだよ」と、同様にぶつきらぼうな調子で言った。

「そんなことはあり得ないと思うのでございますが…」と相手方は口をはさんだ。

また二人は沈黙した。ボーイたちはラーナイの照明を消し始めた。

「今やっと分かったということでございますね…」と、腹違いの弟は手短かに言った。

パーシヴァル・フォードは、まゆをひそめた。そして、意味ありげに相手の顔を見た。

「ハワイ諸島からアメリカ本土に行って、一生もどつてこないとなれば、どれぐらいの費用がかかると思うかね？」と、暗に強制退去を迫った。

「二度とハワイにもどつてこれないのでございますか？」と、ジョーはたじろいだ。「ハワイは僕が知っている唯一の土地なんです。他のところは、寒いですよ。他の土地のことは何も知りません。ここには友だちもたくさんいますが、他の所では気軽に声をかけてくれる人は誰もおりませんしね」

「二度と帰ってくるなど言っているんだ」と、パーシヴァル・フォードは繰り返し強調した。『アラメダ』号は明日、サンフランシスコに向かって出発するよ」

ジョーは躊躇ちゆうちゆうした。

「でもなぜ、そのようなことをおっしゃるのでしょうか？」と尋ねた。「私たちが兄弟だと、もう

知っていらっしやるのに」

「だから、そう言っているんだよ」と、返事が返ってきた。「あんたも言ってたように、みんなそのことを知っているんだ。それが問題なんだ。悪いようにはしないから」

「ぎこちなさと当惑の気持ちだが、ジョーからなくなった。出生と身分について理解が深まり、その葛藤を乗り越えることができたからである。」

「僕がこの地を立ち去ることを、お望みなんですね？」と尋ねた。

「そうだ。あんたにここから立ち去ってもらって、二度と帰ってきてほしくないんだ」と、フォードは答えた。

次の瞬間、目の前がピカツと光り、目の前の弟が山のように大きくなり自分を見おろしているような感覚にとらわれた。また、自分自身がだんだんちっぽけな人間になっていき、顕微鏡で見えないほど取るに足りないものを感じた。人間というものは本当の自分を見ることはまれで、ずっと自分を見つめ続けることは不可能である。けれども、瞬間的に光が発せられていたそのときだけ、フォードは自分自身と弟を真にバランスのとれた視点で見つめることができていたのだ。が、次の瞬間、光は消え去り、いつもの貧弱で強欲的な自分に支配されていた。

「さっき言ったように、これはあんたのためでもあるんだ。悪いようにはしないからさ。十分お金ははずむからな」

「いいですよ。行きますよ」と、ジョーは決断をした。

そして、向きを変えて歩き始めた。

「ジョー」と、パーシヴァル・フォードは弟に声をかけた。「明日の午後、私の弁護士に会ってください。その場で五百ドル、また、故郷を離れている限り毎月二百ドル支払うよ」

「とても親切なお言葉、ありがとうございます」と、ジョー・ガーランドは優しい声で返事をした。「でも、それはあまりにも私の身に余ることです。それはともかく、お金はいただけません。明日、『アラメダ』号で出発します」

そのような言葉を残して立ち去ったが、別れの挨拶はなかった。

パーシヴァル・フォードは手をたたいた。

「ボーイ」と、日本人の従業員に向かって飲み物を注文した。「レモネードを持ってきて」

レモネードを飲みながら、パーシヴァル・フォードは自分自身に向かって、長い間満足そうに微笑ほほえんでいた。